

1. 教育目標
 ○豊かな生活体験や遊びに幼児が主体的に関わり、
 未来に向かってたくましく生きる基盤を育てる

2. 本園の目指す幼児像
 ○自ら考え行動できる子ども（意欲・思考・自立・自律）
 ○豊かな感性が育ち、生き生きと表現する子ども（発想・工夫・自信）
 ○自己も他者も尊重して良い人間関係を築ける子ども（快活・協調・思いやり）

3. 本年度の重点的に取り組む目標
 ○幼児1人1人の育ちを促す教師の関わり方を考える
 ○同僚性を高めながら、より良い職場環境の構築を図る

4. 評価項目の達成および取り組み状況

重点 目標	評価項目	評価指標及び評価結果							コメント 評価に関する説明・意見書
		基準	取組指標	取組 結果	基準	成果指標	成果 結果	総括 評価	
○ 幼児1人1人の育ちを促す教師の関わり方を考える	幼児理解を深めながら、発達や特性を生かした教師の関わり方や援助の工夫	4	幼児が安心して過ごしやすい環境を整えたり、前日の振り返りや記録から子どもの育ちを促す環境の再構成や支援を試みる	2.9	4	(ほとんどの) 幼児が自己発揮しながら活動や遊びに参加し、様々な人と関わりながら園生活を満喫している	2.8	C (2.85)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の援助や関わり方の工夫を考える際、その子の好きなあそびから模索していくことは、定着してきているように感じる。 ・ 好きなあそびが中々見つかりにくい幼児においては、担任がじっくり関わっていく中から好きな遊びを見つけていける様、心掛けていった。 ・ 年齢があがるとともに、教師の関りだけでなく一緒に過ごす友達との関りからの育ちも感じる。個人の育ちが集団を育て、またその集団が幼児1人1人を育てていることを実感した。 ・ 幼児の育ちの原点は「遊び」からである。担任は、幼児が「やってみたい」という気持ちを大切に、その思いを実現できる環境づくりに努めてきた。好きな遊びを通して自己発揮できるよう、関わり方や支援の工夫を重ねてきたことが、子どもたちの成長につながっている。
		3	幼児の課題や育ちを踏まえながら、遊びや関わり方の支援を試す		3	(ほとんどの) 幼児が夢中になって遊び安心して過ごしている			
		2	前日の子どもの姿を振りかえりながら、関わり方を変えていく		2	(ほとんどの) 幼児が楽しそうにしている			
		1	前日と同じ関わり方をする		1	まだ何をしてすごしていいかわからない幼児がいる			
	幼児の育ちを深める為の記録の取り方の工夫	4	記録シートを活用し、幼児の個別な関わり方や支援方法を体験しながら保護者と共通理解を深めていくような記録をとる	2.3	4	(ほとんどの) 幼児の育ちや課題を保護者と共有し、幼児のより良い育ちの為、連携して取り組むことができるようになる	2.9	C (2.6)	
		3	幼児1人1人に応じた支援や関わり方を試して、家庭支援に繋げていけるような記録をとる(個人記録シートをとる)		3	(ほとんどの) 幼児の様子や課題について保護者と共に幼児理解が深まっていくようになった			
		2	幼児の困り感に寄り添った支援方法を記録する		2	(ほとんどの) 幼児の課題が上がる			
		1	幼児の様子を記録する		1	幼児の様子が分かる			

○ 同僚性を高めながら、より良い職場環境の構築を図る	定期的な園内研修（情報交換）を踏まえた組織運営（年間計画に組み込む）	4	2ヵ月に1回程度	2	4	自主的に様々な人と関わりながら、組織の問題解決に向けて提案し、円滑な情報交換ができたり役割分担をしたりするようになった	3	C (2, 5)	<ul style="list-style-type: none"> ・園内研修の回数は多くなかったものの内容は充実しており、担任にとって大きな学びとなった。さらに、研修後の実践での試行錯誤を「自身の課題発見」として前向きに捉える姿勢は、次年度の組織力を高める強みになると感じられた。 ・実研修で得た知識をすぐに保育へ生かすことで「保育の引き出し」が増え、保育者自身が楽しさを感じながら実践意欲を高める好循環が生まれていた。 ・特別支援の講師による園内研修は、担任の保育を肯定し、自信と専門性の向上につながる大きな支えとなっている。
		3	3ヶ月に1回程度		3	研修（情報交換会）で学んだこと、感じたことを皆に報告したり、実際にやってみたりするようになった			
		2	学期に1回程度		2	園内研修に意欲的に参加するようになった			
		1	年に2回程度		1	研修会（情報交換会）に参加している			
	教職員1人1人と信頼関係を構築しながらより良い職場作りを図る	1	同じ組織の仲間として、悩みや困ったことを相談し合い助け合う関係性を構築している	3	1	職員が他の職員や園全体のことを考え良い組織になる様、相談に来るようになった。	2, 7	C (2, 5)	<ul style="list-style-type: none"> ・相談しやすく助け合える「同僚性」が高まり、研修の即実践や外部講師からの助言が職員のスキル向上と保育の楽しさにつながっている。 ・自主性や発信に関する反省も「さらに貢献したい」という前向きな姿勢の表れであり、個々の試行錯誤や感謝の気持ちを次年度の組織力へとつなげていきたい。 ・次年度は、わらべうた・劇構成・特別支援などの実践的研修を充実させるとともに、学年を超えた支援体制や効率的な共有ルールを整え、「支え合い、高め合える職場環境」をさらに強固にしていきたい。
		1	様々な人と親睦を深めるため、積極的に意見交換をしている		1	多学年の職員と関わりが増え、業務が協力的になった			
		1	幼児や業務について同じ学年の職員と積極的に情報を交わしコミュニケーションを図っている		1	仲間とコミュニケーションが良好になった			
		1	日々の連絡や業務内容を報告している		1	保育を楽しんでいるようになる			

※多面的な取り組みの評価 十分だと思う…1 十分とはいえないが普通程度には取り組んだ…0,5 不十分だと思う…0

○取組と成果に関する評価結果

A：達成している B：一部達成している C：一部改善を要する D：改善を要する

○総合的な評価

評価	理由
C	<p>幼児の育ちに寄り添った関わりを模索する中で、担任の思いが先行し、支援が十分に機能しない場面も見られた。しかし、月1回の学年カリキュラムや職員会議を通して多様な視点から助言を受けることで、援助方法を見直し、より適切な関わりへと改善を図ることができた。園全体で幼児を育てるという意識の重要性を再認識した一年であった。</p> <p>適切な援助が機能した場面では、幼児の成長が大きく伸び、仲間同士で育ち合う姿も確認された。日常の遊びや人との関わりの中での教師の意図的な配慮が、幼児理解を深め、成長を支える基盤となっていた。また、具体的なエピソードを記録し保護者へ伝えることで信頼関係が深まり、記録の振り返りが支援の改善にもつながった。</p> <p>一方で、園での支援内容を家庭へ伝え、協働して取り組むことには差があり、今後は保護者との共通理解を深めるための伝え方や、集団の中での困り感を分かりやすく共有する方法を検討する必要がある。また、日々の業務の中で記録をどのように効率的に行うかは大きな課題として残り、負担を軽減しつつ質を保つ仕組みづくりが求められる。</p> <p>外部講師の助言や園内報告会を通して「共に学び、高め合う」職員文化が育ってきたことは大きな成果である。職員からは、実践に生かせる研修、学年を超えた支援体制、若手教諭へのサポート、メンタルケアの場など、具体的なニーズも示されており、今後の体制整備に生かす必要がある。</p> <p>今年度の自己評価では、職員の「より良い保育を目指したい」「仲間と共に成長したい」という強い意思が感じられた。評価点は低めであったが、その背景には自己の保育を厳しく見つめる姿勢と向上心があり、組織の強みともいえる。一方で、この厳しさが自信のなさにつながる場面もあり、適切に自己評価し成果を肯定的に捉えられる支援体制の構築が今後の課題である。</p> <p>次年度は、こうした職員の思いを大切にしながら、「教え合い・支え合う」仕組みをさらに具体化し、質の高い保育と職員がいきいきと働ける環境づくりを進めていきたい。</p>

5、今後、取り組む重点的課題

	課題	具体的な取り組み方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の実態を正確に把握し、望ましい発達を促すための教職員の関わり方を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の育ちを支えるため、支援・援助の方法を全教職員で共有できる幼児理解の体制を整え、園全体で子どもを育む意識を高める。 ・定期的に幼児の課題を精査・検討し、ねらいを踏まえた保育実践を行うことで、幼児理解を深めていく。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の記録方法を見直し、業務の効率化を図る体制を整備する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年間計画を見直し、業務内容を精査しながら、効率的な業務カリキュラムを再構築する。 ・労働環境の改善に向け、教職員間の業務分担と協力体制を改善して、業務時間の短縮と円滑な業務遂行を図る。

6. 学校関係者評価委員会の評価

- ・就学後、幼稚園で育まれた子供の成長を受け継ぐにあたり、身が引き締まる思いである。幼児の育ちの原点は遊びからである。
子供達の可能性を信じ小学校でも、教育の原点（あそび）を充実させていきたい。
- ・幼保小の架け橋プログラムの取り組みが、さらに重要視されている。今後も子供達が環境の変化にスムーズに適応し、安心して学びの基盤を作っていけるよう小学校や地域との関わり（繋がり）を深めていきたい。
- ・保護者からの温かい言葉は、小学校においても教職員にとって大きな自信に繋がる。保護者からの思いや意見を述べられるツールの工夫が望まれる。
- ・若手職員からベテランの職員にいたるまで全ての教職員が、1人1人の子供達をきめ細やかに丁寧に育んでもらっているという安心感がある。
- ・特別支援教育においても、1人1人の特性に合わせた支援や援助が行われていて、子供達がより良い環境の中で生き生きと園生活をおくることができていると思う。
- ・より良い職場環境づくりに向けて、同僚性を高めることの重要性を改めて感じた。職員が楽しく前向きな気持ちで働ける一方で、互いに慣れ合うことなく、成長し合える関係性が築かれていることを実感した。
- ・若手職員の離職は引き続き取り組むべき課題であり、指導にあたる職員の負担も大きいことがうかがえる。
教職員それぞれが自信を持ち、保育を楽しみながら働けるよう、双方にとって無理のない環境づくりを今後も進めていくことが望まれる。

委員会実施日 令和8年3月19日